

おはなしの

今昔

◇おはなしと今昔の意味

ここで「おはなし」とは、幼稚園、保育所のような施設において、数人または数十人の子どもに対して、先生によって行なわれる口演の童話を意味する。また「今昔」とは、明治時代から現在までをさす。

したがって、その聴手は大体就学前二、三年の子どもで、いわゆる幼児後期に属する。だから、そのお話は「幼児ばなし」だが、幼児ばなしといえば、家庭における母親のお話も含まれるので、特に「保育童話」と呼ぶことにする。

◇明治から大正・昭和まで

明治の上半期は、保育施設はまだまことに少なかった。したがっ



上 沢 謙 二

て、特に「保育童話」と呼ばれるものはなかったと思う。

そこで話されるもの多くは、わが国在来の昔話か、外国ものとしては「イソップの譬えばなし」くらいだったろう。イソップの話は案外古くから輸入されて、幾種類かの出版もあったからである。

それから、幼稚園は、外来のキリスト教宣教師によって創められたものが多いので、聖書の記事をやさしくお話化した「聖書ばなし」が、話されたことも想像される。

一世を風靡した巖谷小波の「小波お伽噺」が相次いで刊行されたのは、明治二十七年頃から大正の初めにまで及んだが、それが保育童話として施設で取り上げられたことはあまり聞かない。応用されたことはあるだろうが一般的ではなかったろう。

大正七年に、鈴木三重吉による童話誌「赤い鳥」が創刊され、また昭和のはじめ、小川未明が童話作家として出発したことなど相まって、おはなしの世界にも新しい作家と作品が相次いであらわれ「お伽噺」が「童話」になり「児童文学」になったのは周知のことだが、保育童話もその影響を受けないではいかなかった。しかしそ

これは間接的で消極的で、特に見るべきものはなかったようである。

この間にあって、保育童話の立場から特筆すべき作家は浜田広介である。氏は大正七年から童話の筆を取り、今なお変らざる精進をつづけているが、その作品がほとんど悉く幼年文学であり、またその作風に、いわゆる「ひろすけ調」といわれる独自のものがあって、読む者をひきつけた。しかしその叙述が象徴的技巧的であるため、幼児への口演の実際には不適當な点があるので、しばしば按排されて応用されたが、汎く施設に取り上げられて新生面をもたらしただことは明らかである。

なお、この方面のヴェテランで、保育童話の世界に多くの寄与をした作家として、与田準一、奈街三郎、佐藤義美、徳永寿美子などが挙げられよう。

明治から大正に入りにしたが、幼稚園保育所は次第にその類を増し、教育界の一部門として認められると共に、施設専門の出版物が生まれるようになった。その初めは月刊絵本「キンダーブック」である。

大正末期から昭和へかけて、絵雑誌が幾つか出た。コドモノクニ、こども朝日、子供之友（これは以前からあったが）など。これは直接幼児教育の施設を対象としたものではないが、そこに毎月載せられる幼児童話が、自然に幼稚園、保育所で用いられたことは、見逃がすことはできないだろう。

◇保育童話の出版と著者

ところで、直接施設向けとして、初めて出版された保育童話の本は何だったろう。

私の記憶に誤りなければ、倉橋惣三編「幼児をよろこばせるお話集」。「幼児をたのしませるお話集」の二冊だと思う。これはお茶の水女子大学附属幼稚園で話された童話の中から選び出されたもので、フレイベル館の発行だったろう。

更に逸することのできない作家に、長尾豊がある。おそらく「幼稚園ばなし」という表題で出版された単行本は、これが最初でなかったろうか。これを手はじめに、氏は直接施設向けの童話集や児童劇集を幾冊も著わした。発行所は厚生閣だったが、いずれも相当の売れ行きを示したことは、施設の側においても、漸くにしてこの方面に、深い関心と要求をもってきたことを反映するものといえよう。

自分のことになって恐縮だが、同じく厚生閣から、同じく施設向きの「新幼児ばなし三百六十五日」を出したのは、昭和十年だった。これは主として現代の外国の作家の作品に、各国の民話を加え、毎日のお話の目的と取り扱い方を添えたものだが、爾来改訂を重ねて、現在も続刊されている。

これらと前後して、幼児ばなしの研究者であり幼稚園の経営者である内山憲尚によって「幼児童話の話し方と実例」が、東洋図書出

版会社から、また幼児童話専門の作家ともいうべき武田雪夫によって、国内の作品を編集した「一年間幼児ばなし集」(多分こういう表題だった。発行所不明)が刊行された。いずれも保育童話の世界を対象にしたものだった。

児童文学者協会と民主保育連盟の共編で、羽田書店から「子どもに読んできかせのお話の本」春夏秋冬四冊が上梓されたのもこの頃だったろう。これは熱心に編集され、解説も親切で、保育界にも相当認められ役立ったにちがいない。

高橋さやかが「幼児のための文学」をフレール館から出したのも、この頃からあまり離れていないと思う。これは子守唄から内外の文学作品にまで及ぶ組織的な充実した研究の発表で、今日でも得難いまとまったものである。現在改訂版が博友社から発行されている。

大戦後は、幼児教育の普及と共に、幼稚園・保育所が相次いで設けられ、その従事者も研究心が高まり、保育童話に対するまじめな要求もおこってきたので、これに応じて刊行される施設向けの出版もおびただしく、ここでいちいち挙げるにいとまがない。正に百花繚乱の趣である。

◇保育童話と文学童話

さて、いったい保育童話とはどういうものだろう。

これについてはあまりいわれていないが、佐藤義美はこう述べている。

「スタイルの自由さの点では、幼児童話は最も純粋な童話といえます。ところが、幼児童話にも純粹でなくいい面の作品があります。それは、幼児は保育されている幼い存在だからです。そのために、幼児童話は保育童話のスタイルを取ることがあります。精神や肉体をテーマにして、宣伝文学のようなスタイルを取ります。また社会的な適応性や娯楽性をテーマにして、教育にサービスしたり、遊び相手になったりして、応用文学のスタイルを取ります。このようなスタイルを取ることも、積極的な人生肯定の粹にはいるのですからそれが感動的に書かれていたらそれもまた文学といえます。」

ここでは文学童話と保育童話ははっきり分けられて、前者は純粹であり、後者は宣伝の性質を帯び、応用の働きをもっているとされる。別なことばでいえば、前者は本質的または根元的であり、後者は二次的または派生的であるとも解されよう。

「宣伝」とは、相手に対して特別に訴えねばならぬ目的をもっていることであり、「応用」とは、或る目的に対して特別に当てはまるように調整することである。そういう意味に解釈すると、この場合の相手はいうまでもなく施設に通う幼児であり、目的とは或いは理想であり、道徳であり、科学であり、日常行為のしつけであり、その他万般の事柄である。応用とは相手の幼児の理解と興味に合致

するように、童話の内容と形式を取捨選択することである。

これに対して、純粹の文学としての童話には、何ら「特別」はない。いわば作者の魂の奥から生みだされた絶対的なものである。

作家の与田準一はこの間の関係をこういいあらわしている。

「幼年童話という呼び名と領域は、児童文学の読者論の分化から生まれたが（中略）分化作用は、心理学者や絵雑誌の編集者、またラジオ放送の企画者たち、作家と子どもの伝達仲介者たちによって行なわれた力が強い。が、作家の自発性の発想と結実は、分化の前にかえって濃厚であった。（中略）しかし伝達者たちの向側には、子どもを発達段階的に理解し、保育し、教育し、楽しませよう、という子どもの両親と教師たちの必要性が動きだしていたのであろう。」

いかに、特に幼児向きの童話を要求したのは保育者で、夙くもその方面に手を着けたのである。

更に氏はこういつている。

「発達段階別の区分は、伝達仲介者たちの労にゆだねてもいい。作家の創作時は、空中に安全飛行すること、有意識の中に無心化するエネルギーにゆだねられる。」

◇教育と文学の一致点

保育はいうまでもなく人間教育の営みである。だから、保育童話においては教育が優先する。一言でいえば、それは「教育のための

童話」である。

しかし広い意味においては、児童に関するあらゆる仕事は教育である。なんとすれば、彼らは発達するもの、正しく発達させねばならぬものだからである。この点からすれば、あらゆる児童文学者は教育的な立場に立ち、あらゆる児童文学作品は教育的な意味をもつというべきだろう。もしそれからはずれて、全然教育的立場に立たない児童文学者、全然教育的意味をもたない児童文学作品は、厳密な意味において、児童文学者とも、児童文学作品ともいえないだろう。

よしんば、創作の実際において、他の一切に捉われることなく、我を忘れてひたすら書き綴るとしても、真実の児童文学者ならば、その作品は教育的意味をもたないではないだろう。なんとすれば、その作家が真に児童というものを思っていれば、おのずから教育的にならざるを得ないからである。前述したように、教育的ということは、児童を対象とする仕事においては必然的に伴わねばならないからである。これを抜きにしては、児童に対する仕事は無意味になって、成り立たないからである。

更にまた保育者の側からすれば、宣伝的応用的な立場に立つにしても、その童話が文学的価値を失ってしまうということはあり得ない。

いったい童話の口演ということは、他人の模倣になりやすい。殊に何先生の門下というような場合には、その先生の真似をすること

を、むしろ得意とするようなむきもある。

それに、保育童話となると、内容は単純で、時間は短かいし、聴手は幼児だからなんの批判もない。お話を聴くことそのことが楽しい時代だから、とにかく話せばよろこぶ。それで、話手としては特に工夫することも、苦心することもなく、或いはすらすらと話して、或いは勝手に話して、ことよるといいかげんに話しておしまいにする。それでもすむのである。

こういうところには文学のカケラもない。否、無益な場合もあり、有害な場合さえある。

けれども、真の口演者は単にお話を話すのではない。

サラ・コーン・ブライアントはいった。

「話手はお話と共に彼自身を話す。聴手はお話の筋と共に、そのお話に対する話手の鑑賞力をも味わう。話手の唇にのぼることばは、話手自身のそのお話に対する感覚を含んでいるので、一度口をひらくと、対信の感興が加わる。これは話手の人格を通じて行なわれる濾過作用である」

だから、し細に観察すると、同じ童話を話すにしても、甲と乙とはちがう。それはその人の熱意、経験、表現、技巧においてちがうからである。したがって、聴手が受ける印象、興味、理解、感化もちがうのである。すなわちその話手だけにそなわったその人でなければならぬ独特のものがあるのだ。これは正に一種の創作といえ

よう。

かくて話手の一語一語は聴手の胸の奥まではいり、魂に焼きつけられて、一生涯にわたる感化をさえもたらすのである。

ここにおいてか、保育童話は文学となる。佐藤義美の前述のことばを借りれば「それが感動的に書かれていたら、それもまた文学といえます」ということになるのである。

◇ラジオ時代とおはなし

現代は視聴覚教育時代といえよう。絵ばなし、紙芝居、人形劇に、更にテレビが加わって、大衆の目はこれに捉えられる。殊にテレビの魅力は著るしく、いわゆる「テレビっ児」という熟語さえ生まれた。

そこで「単純な童話の口演はだんだん衰えるのではないか」というような声さえ聞こえるようになった。これは正に「おはなしの今昔」における「今」の新らしい大きな問題だといえよう。

これらの特徴は、いうまでもなく目に訴えることである。ということは、具体的だということ、形を借りるということ、より多く感化がはたらくということである。

ところで「形」といえば、空間を占めることである。「空間を占める」といえば、物事を一定づけることである。「一定づける」といえば、その位置に制限することである。具体的にはつきりする

が、それだけ自由性が削減されて、話手聴手両方の思考活動が、その形に定着的になることをまぬかれない。

話手と聴手の間に何の介在するものもなく、直接的に交渉する場合には、その表現はきわめて自由自在にはたらく。ただ一つのことば、一つのゼスチアで、たちまち広大無辺な宇宙も、悠久無限な時間もあらかわし、反対に、極小極微の存在も、瞬間悠忽の現象もあらかわす。

じっと聴いている子どもは、姿勢はうごかないだろうが、心は静止していない。悲喜憂患さまざまな感情が烈しく湧き、予想、希望、期待、さまざまな想像が強くなる。そのはたらきは、自然で、迅速で、鋭敏である。だから、話中の事件にひきこまれ、人物に同化してしまう。いわゆる話者聴者一体のお話の理想境はかくて実現されるのである。だから、童話は、話者聴者が共に話中の人物事件に参加して、同じく善悪を経験し、利害に直面し、同じ運命を味わうものなのである。

想うに、これほど深い心の結びつきは、この世においては稀だと思ふ。しかもそれが、まだ東西もよくわきまえない幼児を相手に行なわれるとはおどろくべきことではないか。

そういう状態を導き出すのは、感覚的形式的な「もの」が、話者聴者の間に介在すると困難であり、全然介在しない直接的、心理的、精神的な交渉によってより多くまた徹底して行なわれるのである。

つまり「心より心へ」というのが、童話独特の世界なのである。

もちろん、視聴覚教育にもおはなし教育のもっていないいろいろな特徴を有しているが、後者にも前者のもっていない特徴をそなえていることも明らかである。しかもその深さと純粹さにおいては、より多くのものをもっているのではなからうか。

こういうおはなしの世界は、人類のあらん限り滅びないだろう。否、すべての事と物が、形式化し、感覚化することが多くなればなるほど、その存在は必要になり、そのはたらきは有意味になるだろう。

◇保育者の責任と仕事

今日の保育者は、新しい視聴覚教育の使命を認識し、その健全な発達に努めると共に、古くから伝わる童話口演の価値を保存し、そのはたらきを正しく導かねばならない。特に保育童話の方面は、従来どちらかといえばなおざりにされた観がある。文部省所定の保育の領域においても「言語」の中に包含されて、一見、言語の指導または訓練の一部門のように思い做される傾きがないとはいえない。けれども、保育童話がそれ以外の、それ以上のことばと使命をもつことは明らかである。このことばと使命を充分に發揮させることはこれからの保育者のきびしい責任となり、たのしい仕事となるべきではなからうか。

(鹿沼幼稚園長)